

授業を「公共空間」に

——対話と討論で発見する新しい自分——

絹 村 俊 明

1. はじめに——授業構想を支える3つの思い——

高校教師として37年間務めた私が、今年4月から中央大学の教職課程の授業を担当するにあたって、こんな授業をつくりたいと考えたことがいくつもあった。

まず第1は、現在の教育現場のリアルな実践現実を学生たちに伝えたい、ということである。教育現場ではどのような特性のある生徒たちが存在し、教師はそういう生徒への教育をめぐるどのような取り組みをし、教師集団や保護者たちとどのような関係性を紡ぎ協働しているのか、またその中で教師としての仕事の喜びと苦悩、そして課題はどんなところにあるのかを具体的な実践の事実を示しながら授業の中で学生たちとともに探っていきたいと思う。

第2は、37年間の自身の教育実践を総括してみたい、ということである。私がこれまで研究会¹⁾の仲間とともに実践・研究を重ねてきた生活指導実践とその理論は、教師を目指す学生たちにどのように受け止められるか、学生たちとの応答を通じて総括的に検証し、新たな実践論として更新していけたらと思う。

これら2つのことは、教職課程で教える「実務家教員」（私自身はこの言葉を好まないが）として期待されていることでもあろうし、また「職業

研究者」ではない私が大学での授業を担当する際の数少ない strong point でもあろう。

第3は、教育を語ることが、「未来を語ること」だとすれば、教育の本質とその方法を論じ合う中で、その先にどんな社会や世界を構想できるのか、という問題を学生たちと語り合いたい、ということである。そしてそれは現在の社会や政治を問い直すことでもあり、その場合当然、授業担当者としての私のポジショナリティが問題化され、授業における「政治的中立性」とは何か、そして「政治的中立性」を担保するものとは何か、が問われることになる。

2. 具体的な授業形態

こうした思いから構想した授業形態は、扱うトピック・項目を具体的な実践に語らせ、その実践分析（協同して実践を読み解く作業）の過程での対話・討論で、トピック・項目についてのそれぞれの認識を深めていくというものであった。さらに、対話・討論が起こりやすいように授業集団を小グループに分け、グループ討論から全体討論という、いわゆる「二重討論」のスタイルを取り入れた。教室を討論する空間（＝「公共空間」）に変えることで、「公共性の4つの特徴」²⁾のひとつとされる「意外性・予測不可能性」に出合い、これまでの自分自身の認識や考え方が大きく揺らぎ、変わっていくことを学生たちが実体験できる場をつくり出したいと考えた。

今、教育現場で闊歩している「アクティブ・ラーニング」という授業形態は、ともすれば「正解主義」の枠組みの中で生徒に活動や討論を促すだけのいわゆる「パッケージ化されたアクティブ・ラーニング」³⁾に陥りがちである。そこでは、公共空間の「複数性」「共有性」という特徴から生み出される「意外性」が封じ込まれ、学びの深まりが疎外される可能性がある。授業を「公共空間」に変えるということは、自分が変わっていくこ

との「わくわく感」を含んだ、「真の学び」の場をつくりだすことであろう。そこに近づく授業がもしつくりだせたなら、学生たちはその体感を将来の教師になった時の自らの実践構想に生かすことができるかもしれない。

具体的にはまず、毎回の授業の最後の10分はmanabaのシステムを利用した出席確認と「アンケート」という名の振り返りの時間にした。そこでは、その日の授業を受けての感想・意見・質問を自由に記述させると同時に、自分の振り返りを「名前付き公開可・匿名公開可・公開不可」の3つから選ばせた。そして「公開不可」以外の振り返りをすべて印刷し次の授業で「みんなの感想」として全員に配布した。また、振り返りの中で論点になりそうな記述や新たな視点を提起しているものをピックアップし、次の時間の冒頭に提示して私がコメントを返し、時にはみんなに討論させた。

グループは、それぞれが自由に座っている座席の近くの者同士3人～6人で編成した。したがって座る位置が毎時間違う学生は毎時間違うメンバーとグループをつくった。責任者（班長）は初回だけは決めていたが、班長なしでもグループで話し合いができそうだし、班の意見を発表するときの発言者も自分たちで決められると判断し、以後は班長を決めなかった。ただ、回を重ねるごとに、班の中でだれが学習のリーダーの役割を果たしているかがはっきりとしてきた。

3. 実際の授業の内容

前期は、後楽園キャンパスで「特別活動の指導法」を2コマ、多摩キャンパスで「生徒指導論」を1コマ担当した。ここでは「生徒指導論」（文系学部学生63名が履修）で実際行った前期15回の授業内容を以下に紹介する。

お約束通り、対話・討論を中心に据えた授業は、こちらが当初予定した

回	トピック	教材	授業形態		
			講義	討論	他
1	Introduction・実践記録との出会い	実践記録「オズの国の生徒たち」 パワボ資料	○		実践の 輪読
2	性の多様性・教師と生徒の「対等性」	実践記録「オズの国の生徒たち」 パワボ資料	○	○	
3	英語劇視聴・担当教員との出会い	「オズの国の生徒たち」DVD パワボ資料（担当教員自己紹介）	○		DVD の視聴
4	教育とは？「教えること」・「学ぶこと」とは？	ルイ・アラゴンと竹内常一の教育にかかわる言説 パワボ資料	○	○	
5	「生徒指導」とは何か？「生徒指導」と「生活指導」	生徒指導要諦他、パワボ資料	○	○	
6	教師の「遂行中断性」・「生徒指導」と「生活指導」	「振り返りアンケート」、パワボ資料	○		
7	生徒指導にかかわる教師の協働性	レポート課題「私の『生徒指導』・原風景①」より	○	○	
8	「強い」指導・頭髪服装の指導をどう考えるか。	レポート課題「私の『生徒指導』・原風景②」より、パワボ資料	○	○	
9	体罰について	レポート課題「私の『生徒指導』・原風景③」より	○	○	
10	体罰と「教育的愛情」・実践分析の方法	「体罰」にかかわる文科省通知等、実践分析の方法論・パワボ資料	○		
11	実践分析入門	実践記録「初めての学級担任・席替え」	○	○	
12	「いじめ問題」とどう向き合うか	実践記録「一平君が学校をやめたと言っている」	○	○	
13	生徒の声を「聞き取ること」とは	実践記録「学校に居場所のない生徒に出会って」	○	○	
14	特別支援教育	実践記録「生きづらさをかかえた生徒から学校を見直す」	○	○	
15	まとめ	「生活指導論で学んだこと」1分間スピーチ			スピーチ

シラバス通りにはいかない。1コマの授業が意図した通りの時間配分で終わらず、十分煮つまらないうちに討論を打ち切らざるをえなかったり、次の授業に課題を持ち越したりで、なかなか1コマ完結というわけにはいかず、1コマの授業構成のまとまりのなさは否めない。反面、ひとつひとつ

のトピックについて討論が盛り上がり、「生徒指導」についての学生の認識が深まっていったことも確かなように思える。

学生たちの討論とそれへの私の応答について、紙幅が許す限りいくつかのトピックを取り上げ、「振り返りアンケート」の学生の声を紹介しながら振り返ってみたい。

4. 具体的な授業展開（いくつかのトピックに沿って）

(1) 偶然のテーマ：「ジェンダー」・「性の多様性」

第1回の授業では、簡単な自己紹介と授業ガイダンスの後、いきなりグループ編成をして実践記録「オズの国の生徒たち」⁴⁾をグループ内で輪読させた。この実践記録は、すでに授業開始1週間前にmanaba上で、第1回のレポート課題として感想を800字程度で書くように指示を出してあったので、一度は目を通したという学生も多かったが、まだ読んでいない学生もいた。そこで私は、その場で「まずは輪読を」という指示を出した。実践に登場する生徒たちはアルファベット表記にしてあるが、そこを適当に自分たちで名前をつけて楽しんでいるグループがあったり（これは後でその理由がわかったが）、生徒や教師のセリフの部分をそれなりの感情を込めて読んでいるグループもあったりでなかなかおもしろかった。

冒頭からいきなり実践記録を読ませたことの意味は、「具体的な実践・学校で起こっている具体的な事実」を通して学ぶ授業であることを最初から印象づけたかったことと、これから「生徒指導論」を教えようとする側の私が、実際に何をめざしどんな実践をしてきたのか、を自己紹介代わりに示したい、という思いもあった。実はこの実践記録を書いた浅田正登は私のペンネームであった。学生たちにそれを伏せて読ませたのは、後のサプライズの意図もあったが、実践についての自由な意見交換を期待していたからである。実践者の目の前で、ましてやそれが科目担当教員ならなお

さら、正直な批判的意見は出しづらいのは想像に難くない。

感想の中でまず出てきたのが、実践記録自体が読みづらい、というものであった。実践記録が長編（A4・12ページ）であることもその理由のひとつであったが、学生たちにとって一番きつかったのが、登場人物の表記がアルファベットで、しかも10人以上登場してくることであった。生徒をアルファベットで匿名化して実践記録を書いたり読んだりすることに慣れてしまっている私にとってこれは意外な発見であった。仮名でもいいから具体的な名前でない人物としてイメージできない、らしい。これは確かにもっともなことである。実際、小学校実践の中には「やっちゃん」とか「ひろくん」とか仮名で記してあるものも多いし、何となく「臨場感」をもって実践記録が読める。グループの中で勝手に名前を付けて輪読していたグループを私はほめ、そして高校実践の記述もこれからそうしたほうがいいのかもかもしれないと思い、学生たちにそのことを詫びた。

ただ少し気になることがあった。「人物像をイメージできない」という意見をもう少し聞き込んでいくと「性別がはっきりしないと、実践記録の中の人物関係や起きていることが理解しづらい」という意見が学生たちから出てきたのだ。手を挙げさせるとかなりの数がそう思っていることがわかった。

そこで、「何故、登場人物の性別がわからないと理解しにくいのか？」という質問を投げかけグループ討論させた。全体討論で手を挙げた学生が、「男と女では、例えばケンカの仕方なんか違うと思うから、性別がはっきりすれば、なんでそうなるのか筋を追いやすい」と言う。私が、「男と女ではどうケンカの仕方が違うんだろうか？」と聞き込んでいくと、ちょっと慌てた様子で、「それは、男は、なんか、さっぱりしてるじゃないですか、ケンカしても。女は、何というか陰険というかねちねちと……」と言う。私は全員に向かって本当にそう思うか尋ねた。ぽかんとし

た顔をしている学生がたちに、私は「私は一応ヘテロの男なんですけど、結構ケンカすると陰険でねちねちしますけど」と言い、ジェンダーの問題を語った。

この問題はこれで終わらなかった。学生たちが実践記録の主要な登場人物である R という生徒が何故英語劇に出演することをそんなにも頑なに拒否するのかわからない、という疑問を出した。私は、記録に書いてない事実として R が「F to M」のトランスジェンダーであることを明かし、声を含めた自分の「身体」をステージ上にさらしたくないという苦しみだということを話した。そして「性の多様性」への認識の必要性和 2016 年の電通の調査では人口の 8 %が性的マイノリティーであるという事実を受けても、相変わらず、「男女二元論」であり続ける学校の問題性⁵⁾について触れた。

学生の振り返り

- ・前回輪読した「オズの国の生徒たち」が、今回の授業でまさかこんなにも展開するとは思わなかった。男だとか女だとか関係なく、一人の人間として生徒と関わり合っていくことも、性の多様化に対する理解が社会に求められている今日では必要なことだと感じた。また、グループワークするなかで他の生徒の意見も知ることができ、レポートを書いた時の自分の意見を見直すことができ良かった。
- ・最初に話し合った、性別の問題では、私はある程度男女の差を知っていたほうが生徒と対話しやすいのではと思っていたが、性的マイノリティーの方々を傷つけてしまうこともあると思い知らされ、対話の難しさを痛感した。
- ・今日の授業で、男女二元論からの脱却が必要とあったが、社会のほとんどのルールは男女の 2 つで出来ているため、この問題は直ぐに反映

されることは難しいと思った。一方で、性別という概念そのものより、個人の性格や人柄の方を重要視すべきなのだったと思った。

- ・まず、性別は人間関係において重要だと考えていたが、セクシャルマイノリティへの考慮が眼中になかったのは視野が狭かったと反省した。性別は明るいだとか真面目だとか、そういう性格のひとつの要素として扱った方が良いと思った。
- ・今回の講義では性の多様性についての問題がとても印象に残りました。男女で分けるのではなく、1人の人間として向き合うべきだという考えは本当にその通りだと納得させられました。しかし、体育の授業で持久走の走る距離が男女で違ったりだとか、男女の体力的な差から区別している場合もあるので学校という組織から男女区別を無くすのはとても大変だとは思ってしまいました。
- ・わたしは先週の感想で男女の性別がわかったほうが良いとコメントしたが、今日の授業でジェンダーの難しさがあるため、男女の違いを言及するのもどうかと思い始めた。
- ・ジェンダー論は、確かに自分にも染み込んでしまっているなと気が付いた。女と男は考え方が違う、と日頃から思っていたがそれは思い込みで、実際には多様なタイプの人たちがいることに気がつくことができよかった。特にLGBTのひとのことは知っていても身近には感じていなかったのが、教員になったらこのようなこともあるのかと知ることができた。
- ・最初の性別がわかっていた方が良いと言っていた方々の意見に対して、自分の男女感にはバイアスがかかっている可能性が多分にあり、時代や自分たちの生活してきた背景が如実に反映されていることを全く振り返る気がないのか思っていました。それは無個性化を主張することにならないか？と反論した方がいらっしゃいましたが、僕はそう

は思いませんでした。むしろ、その人の持っている、男女への偏見を個性としてみていることに残念だと感じました。またジェンダーについて考える機会があると思いますのでその時には積極的に考えていきたいです。

(2) 教師と生徒は一線を画すべきか

同じ「オズの国の生徒たち」の実践記録を読んだ感想レポートの中で、いくつかの疑問が出された。例えば以下の通りである。

- ・ところで『私』の生徒たちに対する言葉の投げ方や心情に二つ疑問を抱きました。二つ目は12ページ二十六行目「私と対等に『ケンカをした』と思っていることがなんとなく誇らしかった」という心情です。これは教員としてどうなのでしょう。生徒と向き合えること自体は教員として真っ当に職務を果たしていますが、『対等』になってしまっただけでは立場が立たないので、今後の仕事としての生徒指導に影響を及ぼしてしまうのではないかと心配になりました。
- ・浅田先生はクラスの劇に『対等な仲間』として貢献できたこと、また生徒のUが自分との対話を『説教』ではなく『ケンカ』だと思っていたことに喜びを感じていた。教師は生徒と親しくする上でも、違う立場であることを認識させうるために『一線』を引くべきではないのか。

同じ個所を、つぎのように肯定的に受け止める感想もあった。

- ・浅田先生が最後生徒との関係において、『いがみ合い』ではなく、『ケンカをした』という表現を好意的に受け取っていることは、自身を単

なる『指導者』としてではなく、人として彼らの理解者、『対等な仲間』になる事を願って行動をしているためであると、私は読み取りました。その浅田先生の自己認識が前提にあってはじめて、生徒たちとの交流が上手く行ったのだらうと思いました。

そこで私は、これを論点化し、「教師と生徒の間に一線を引くべきか否か」というテーマで討論させた。

以下が学生たちから出た意見である。

- ・教師と生徒の一線は必要であると考えます。ただその一線が、教師としての権力の暴走であってはならない。
- ・教師と生徒の立場上の違いはあっても、人としては対等な立場で、一人の人間同士として話をするべきであると感じました。
- ・私は一線を引くべきだと思います。教師である以上指導する立場に立つわけなので、教える側と教わる側の立場はなにがあろうとはっきりとさせておくべきだと思います。友達のようにかかわるのではなく、親身になって相談にのれる教師が信頼される教師だと私は思います。
- ・教師と生徒の「対等性」については、基本的に、学級全体を前にした時は指導者としての一面を、生徒一人一人と向き合う時には1人の人間としての一面を大切にすると、という意見にはとても納得しました。
- ・「対等」というのはなめられている、というわけではなく、心を開いて自分と向き合ってくれている、ということだと思います。
- ・私は一線を画すべきだと考えました。それは、教師と生徒の間にあるべきなのは対等であるという意識ではなく、「尊敬」であるべきだと思います。そしてその尊敬を基盤に信頼関係を築いていくことが理想であると考えます。